

〔解題〕高橋亨の京城帝國大學講義ノート

A Bibliographical Introduction to Takahashi Toru's Lectures in Keijo Imperial University

権 純哲*

KWON Soon Chul

京城帝國大學創設に参畫し、法文學部朝鮮語學文學第一講座教授となる高橋亨は、朝鮮文學／史のほか朝鮮思想／史・朝鮮儒學／史を講義し、學問的基礎・骨格を作り上げた。彼の京城帝國大講義ノートは、既知の著書・論文とは異なる性格を帯び、帝國・植民地學問として誕生した朝鮮學の實態を明かす資料としてその意義は大きい。その概観と、この研究に至る経緯、高橋亨と京城帝國大學につき略述した。

キーワード：近代學問、朝鮮思想、京城帝國大學

高橋亨の京城帝國大學講義ノートは、朝鮮思想関係が全66冊、朝鮮文學関係が全44冊現存しており、天理大學時代の教え子であり、天理大學名譽教授であった故大谷森繁先生が預かって保管して來た。2012年末、朝鮮思想関係講義ノートは、翻刻研究のために、大谷先生より託され、その間、翻刻された一部が本紀要に掲載され公開されており、現在、全66冊の翻刻作業を終えたところである。大谷先生に成果の一部もお見せできなかったことを悔やみ、ご靈前に誓った翻刻作業を完了した今、この解題を認める次第である。

今までの経緯

まず、高橋亨の京城帝國大學講義ノートに関連して、今までの経緯を記しておく。

筆者は、1996年2月「高橋亨の朝鮮思想史研究」（本紀要第33巻第1號、1997）草稿を書き終え、探し求めていた高橋の博士學位論文の手がかりをつかみたく、また彼の天理時代の活動について調査するため、天理大學を訪問、大谷先生に面談したことがある。初対面である筆者に親切且つ詳細に、師高橋亨のことは勿論、先生自身の修學時代の遍歴をも伺うことが出来た。その時、①遺品に講義案ノートがある、②朝鮮學の開拓者である、中國と違うものを探し求め文學に関心を持った、③朝鮮思想史および文化史の執筆を、特に今西春秋氏が勧めたが、資料の不足により不可能である、また新しい學者の新しい研究業績が續出している、という學者的徹底さがあった、と話されたことが筆者の出張メモにある。振り返ってみると、大谷先生は直接託された師の講義ノートが世の光を浴びることを希っていたような気がする。だが當時筆者は同講義ノートにそれほど注意していなかったし、その存在を記憶に留めようともしなかった。それから15年、意外なところで、同講義ノートと直接対面することになった。

2010年春、東京大學出講中の筆者は、同韓國朝鮮文化研究室にて高橋亨朝鮮思想関係講義ノ

* くおん・すんちよる、埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授、韓国思想史・東アジア近代學術思想

ートを實見する。同研究室主任川原秀城教授は、高橋亨の朝鮮儒學論文集の刊行を準備していて、富山大学名譽教授藤本幸夫先生より高橋亨の講義ノートの存在を聞き、仲介あって大谷先生から一時借用中であつたのである。川原先生の配慮あって筆者は春季中、同講義ノート全 66 冊の概容を調査することが出来た。特に、學界に知られたことのない「異學派」の存在を發見し、取り急ぎその研究に着手したのである。

2011 年、川原秀城・金光來編譯『高橋亨朝鮮儒學論集』の公刊に際して同講義ノートの黑白複寫が『高橋亨朝鮮思想資料』と名付けられ東京大學韓國朝鮮文化研究室にて公開され、その存在が世に知らされた。同講義ノートを閲覽した川原先生が「遺憾ながら高橋の直筆、草書解讀に自信がなく最終的には従來の方針通り既刊の論文から選擇することにした」(解説)という通り、『高橋亨朝鮮思想資料』を複寫して解讀に格闘した「異學派」講義ノートの難讀さは筆者の想像した以上であつた。

2012 年初め、筆者が研究分擔者をつとめていた基盤研究 (A)「東アジアにおける朝鮮儒教の位相に関する研究」の研究代表島根縣立大學教授井上厚史氏より、同年 9 月に開催される臺灣大學人文社會高等研究院主催の國際學術研討會「東亞視域中的韓國儒學研究」の發表者に推薦したい旨の相談を受け、その間取り組んで來た「異學派」研究をまとめ「高橋亨の朝鮮儒學研究における異學派—京城帝大講義ノートを中心に—」を發表した。高橋亨が研討會のメイン・ターゲットであつたこともあり、參加者の同講義ノートへの關心は非常に高かつた。

あらためて同講義ノートの全容を學界に知らせる必要を痛感した筆者は、井上氏¹のほか同研究分擔者京都府立大學教授中純夫氏²に共同研究を持ち掛け、2013 年春、三人で天理を訪問し、大谷先生に面會、高橋亨講義ノートの翻刻とともにその人と學問の全容究明という研究計畫を説明したところ、全面支援の旨を表明され、激勵の言葉をも戴いた。同講義ノートを託されたのはこの時のことである。また、文學關係講義ノートは、研究關心を示していた韓國延世大學校教授李胤錫氏に託したと聞き、すぐ渡韓、李教授に面會し、その實物の一部を確認するとともに研究計畫中であるといひ、今後研究協力を模索していくことを話し合つた。

このようにして筆者の解讀翻刻作業は始まり、まず東京大學韓國朝鮮文化研究室の『高橋亨朝鮮思想資料』のコピーを利用した臺灣大學での發表原稿を、あらためて講義ノート實物と對照し訂正増補して「増訂：高橋亨の朝鮮儒學研究における「異學派」—京城帝大講義ノートを讀む—」(本紀要第 50 卷第 1 號、2014)を公刊した。これは同講義ノートを取り上げた最初の學術論文となつた。2015 年、この中國語譯が拙論「高橋亨の朝鮮思想史研究」修訂版の中國語譯とともに収録され、臺大出版中心より公刊された林月惠・李明輝編『高橋亨與韓國儒學研究』は、高橋亨専門研究書の嚆矢である。

高橋と同講義ノートに對する研究は、當初日本思想・中國思想・韓國思想専門の三人共同研究として計畫されたが、3 年間、科學研究費獲得に失敗、4 年目に筆者の單獨研究として申請し

¹ 高橋亨に關し、井上厚史「高橋亨の李退溪解釋—以與張志淵的論爭爲中心—」林月惠・李明輝編『高橋亨與韓國儒學研究』臺灣大學出版中心、2014、同「資料翻刻：高橋亨『朝鮮儒學史』第十冊(昭和三年三月三十日)」『北東アジア研究』第 26 号、2015.3 がある。

² 高橋亨に關し、中純夫「高橋亨『朝鮮の陽明學派』譯注」『東洋古典學研究』第 36 集、2013 がある。

たところ、基盤研究 (C)「高橋亨『京城帝國大學講義』の研究」として行われることとなった。

2016年3月、研究旅行に奈良入りした際に、出たばかりの翻刻「朝鮮異學派之儒學：講本」抜刷を持参し、大谷先生宅に連絡したところ、去る11月20日に逝去されたと聞き、無念にもご靈前に報告することになった。あらためて引き続き翻刻を完成することを誓った。その一か月後、この科学研究費事業の交付通知が届いたのである。

その間、「朝鮮異學派之儒學」の翻刻を進めるとともに、研究成果を以下の研究会と国際学会で発表した。今まで本紀要に掲載し公開されている「資料翻刻：高橋亨京城帝國大學講義」をその次に列記する。

「沈大允における心學」：基盤研究 (A) 2014 年度研究会

「李炳憲の儒教思想について—高橋亨京城帝國大學講義の再検討—」：

韓國慶尙大學校南冥學研究所主催の国際シンポジウム

「眞庵李炳憲の學問と儒教復興運動」、2015年4月

「李炳憲と高橋亨」：基盤研究 (A) 2015 年度研究会

「實學派と異學派」：韓國實學學會秋季国際學術大會「再び實學を考える」、2016年9月

「朝鮮異學派之儒學：講本 (上)」2015

「朝鮮異學派之儒學：講本 (下)」2016

「朝鮮異學派之儒學：講義案 (上)」2016

「朝鮮異學派之儒學：講義案 (下)」2017

「朝鮮思想史概説 (上)」2017

「朝鮮思想史概説 (下)」2018

いっぽう、朝鮮文學関連講義ノートに関しては、李胤錫「高橋亨の京城帝國大學講義ノートの内容と意義」(『東方學志』第177輯、2016.12：韓文)が発表され、その概容が世に知られるようになった。

筆者は2017年6月、延世大學校國學研究院の第461回国學研究發表會において「高橋亨の遺産發掘：京城帝國大學講義研究序説」を發表し、同大學名譽教授李胤錫先生を中心とした高橋の朝鮮文學關係講義ノート研究メンバーと研究交流を行った。その際、同研究チームに翻刻計画はないと伺ったので、筆者の翻刻作業が一段落した2018年夏、李先生に朝鮮文學關係講義ノートの翻刻をも進めたいと傳えたところ、今回計画があつて資料提供については検討する旨の返事をいただいた。

2018年9月に「高橋亨の朝鮮儒學史における盧守愼の記述と評價」を韓國陽明學會主催の蘇齋盧守愼国際學術大會で發表し、「高橋亨の退溪觀」について嶺南退溪學研究院學術發表會で報告した。

今後、高橋亨朝鮮思想關係講義ノートの公刊を進めていく。なお、資料提供があれば、朝鮮

文學關係講義ノートの翻刻を行う。

高橋亨と京城帝國大學

高橋亨（1879～1968）³は、東京帝國大學文科大學漢學科にて學び1902年卒業する。そして早稻田大學講師⁴や九州新聞主筆を務めた後、1904年末に大韓帝國の官立中學校外國人教師として雇傭招聘されて渡韓、韓國語を學習しながらその研究に従事し、1909年に『韓語文典』を博文館にて刊行、生活言語に現れる韓國人の心情・思想を究明すべく取り組んだ成果『朝鮮の俚諺附物語集』を翌年日韓書房にて出版する。韓國併合後は朝鮮總督府囑託として宗教調査に従事し、佛教研究に関心を持ち、さらに儒生の動向調査より儒教研究に取り組む。これらの調査研究の成果は、その都度、新聞や雑誌に發表され、小冊子に公刊される。

1919年、高橋は東京帝國大學より論文提出による文學博士學位を授與される。現在實物未發見の學位論文「朝鮮の教化と教政」は、（一）三國より高麗に至る佛教と儒教、（二）李朝の佛教と教政、（三）朝鮮現在宗教の研究、（四）李朝儒學者源流の四部より成り、紙數約二千六百枚と、『官報』第2259號が伝え、また「朝鮮總督府囑託の故を以て取調局保管の典籍は勿論、寺院の秘籍をも閲讀するの便宜を得、加之朝鮮の言語文章に熟達せるを以て口碑傳説等、成書の徴するに足らざるものは古老等に就きて之を研究するの便利を有せり。此れ著者か從來學者の今た知るに及はざりし多くの材料を獲、本論文に於て朝鮮佛教歴史及び教政、殊に宗教政策研究の上に寄與すること甚大なるを致せる所以なり」（元カタカナ、句讀點は権）と評價された。

熟達せる朝鮮言語文章能力を駆使した高橋の文獻研究・實地調査による學位論文は、「宗教政策研究の上に寄與すること甚大なる」との評價どおり、帝國アカデミズムによる植民地官學の先驅をなすものであった。

高橋は、1923年に發足された朝鮮帝國大學創設委員會幹事としてその中心的役割を擔う。翌年、京城帝國大學官制公布とともに豫科が設置され、1926年京城帝國大學は法文學部と醫學部をもって開校する。朝鮮文化研究の中心となりそれを先導する使命をもって誕生した植民地朝鮮の帝國大學、法文學部朝鮮語學文學第一講座教授に就任した高橋は、名實とも朝鮮文化研究の先頭に立つ。語學專攻の小倉進平（1882～1944）が助教授として朝鮮語學文學第二講座を擔當し、開校後しばらくして今西龍（1875～1932）京都帝國大學教授が兼任として朝鮮史學講座を擔當する。文・史・哲に代表される近代人文科學において朝鮮學チームは哲學不在の體制にて出帆するが、渡韓後經歷と業績を積んだ文學博士高橋があった故に朝鮮思想の講義は存在することができたのである。

このようにスタートした京城帝國大學の朝鮮學は同時代狀況に歸着させる朝鮮研究という特徴を持つ。すなわち、その朝鮮研究とは近代以前の社會文化を中心にして展開され、

³ 『朝鮮學報』記念號に高橋亨の年譜がある。拙稿「高橋亨の朝鮮思想史研究」『埼玉大學紀要』1997、同修訂中國語譯「高橋亨の朝鮮思想史研究」『高橋亨與朝鮮儒學研究』臺灣大學出版中心2015、川原秀城・金光來編譯『高橋亨朝鮮儒學論集』2012附録の通堂あゆみ「高橋亨と朝鮮」を参照。

⁴ 文學士高橋亨述・早稻田大學出版部藏版の早稻田大學卅六年度文學教育科一學年講義録『書經選釋』と同二學年講義録『書經選釋』がある。内容は同じである。

結局、大日本帝國の歴史文化に収斂・包攝させる同時代の解釋による歴史的叙述に一貫する。帝國植民地の朝鮮學たるゆえんである。

高橋によって構築される朝鮮文學は、兩班による漢文學をその中心に配置し、その底辺に庶流文學および閩房文學、そして民謡⁵を位置させる。兩班と庶流、男性と女性、漢文とハングルの對立あるいは上下・優劣の構造的説明がその基底をなす。庶流・女性・ハングル文學を取り上げた高橋の先見性は注目に値する。

朝鮮思想研究において、支那思想の模倣に過ぎないという朝鮮人の思想上の從屬性・非獨立性の主張は、從來批判された通り、帝國意識に溢れる朝鮮思想不在論であり、その植民地官學イデオロギーを如實に體現するものであった。だが京城帝國大學講義ノートは、彼の學問的模索や達成を伺える資料として重要であり、漂っていて感じさせられる學究の純粹さと誠實さは近代學問の繼承者たるを髣髴させる。

1939年4月に停年退職した高橋は、同年11月から翌年3月まで『斯文』に「李退溪」を五回連載し、12月総督府機關誌『朝鮮』に「王道儒道から皇道儒道へ」を發表する。彼の學問の性質如何を如實に示す對照的題目であり、不協和音の交響曲あるいは不條理の調和にほかない。

翌年、高橋は、京城帝國大學総長を歴任した速水滉（1876～1943）、法文學部長を歴任した藤塚郷（1879～1948）とともに最初の京城帝國大學名譽教授の稱號を授かり、また朝鮮總督府施政三十周年を記念して行われた第一回朝鮮文化功勞賞を授與、「大正十五年以來、京城帝國大學朝鮮文化講座を擔當し、朝鮮文學史、朝鮮儒學史、朝鮮佛教史等前人未踏の分野を研究開拓し、之を大系付け、特に朝鮮の儒學の社會思想及び教化に及ぼしたる影響に付き多年研究に努め、斯界に貢獻する所大なり」（句讀點一部は権）⁶と、その功績が稱えられた。

講義題目

高橋亨が1926年4月朝鮮語文學第一講座擔當教授赴任してから1939年4月停年退職するまでの在職中に擔當した講義題目の全容はまだ明らかになっていない。『青丘學叢』⁷第四輯以降

⁵ 郷歌の解讀研究を先導した小倉と一緒に高橋は民謡調査を帝國學士院の研究支援のもと（1934, 1935）に進めてもいた。

⁶ 『朝鮮』第305號（昭和15年10月）「施政三十周年記念式典舉行」。

⁷ 『青丘學叢』第一輯（1930.8）彙報の「青丘學會の創立」によると「大正十三年京城帝國大學開校せられ、同十五年その法文學部開かれてより以來、新銳の學徒が相ついで京城に來り、朝鮮を中心として極東文化の學術的研究に志す者も尠からずして、頓にこの方面の進展を見るに至つた。また朝鮮總督府も既に始政以來二十年を經過し、各方面に互る調査事業も漸く成績顯著なるものがあり、専門の學者を聘して事に當らしめたもの多く、學術的寄與も亦た極めて大なるものがあつた。而して各々研究調査の結果は、特殊な限られた機關に依つて發表せられるのを常としてゐた。… 今回京城帝國大學・朝鮮總督府及び朝鮮總督府朝鮮史編修會其他に於ける同志が相圖つて「青丘學會」を組織したのは、實に上述の闕を補はんがためにして、朝鮮を中心とし滿洲を中心として極東文化を研究し普及することを以て目的とするのである。…」とあり、高橋は評議員として參加する。同彙報に高橋著『李朝佛教』の書評が載る。高橋は第七輯（1932.2）研究に「弘齋王の文體反正」を、第十二號（1933.5）僉載に「併合前に於ける朝鮮學校の實況」を發表する。第三十號（1939.10）の「終刊の辭」には「史學を中心とする半島文化の研究機關として、青丘學叢の歩み來つた路は、華々しくはなかつたにしても、堅實にして確乎たる信念を以て荊棘を拓いて來たといへる。未だ他に専門の學術雜誌を持たぬ朝鮮としては、まだまだ私達に負はされた仕事の尠くない事を感じるのであるが、青丘學會創立の當時とは半島の社會状態にも著しい變化を見せ、文化的雰囲気にも非常の發達を示して居る今日、此邊で心機一轉の必要を認めるに至つた。半島の文化史的研究は決して半島其ものの爲のみでなく、我國全般の文化史的發展を成へる上に重大な意義と役目を持つのであるが、大陸發展の基地としての新しい使命の前に立つ半島と

「彙報」に掲載された「京城帝國大學法文學部講義」により整理し、また他から一部を補うと、以下の通りである。

- 1926 (昭和 1) 年度～1928 (昭和 2) 年度 未調査
1929 (昭和 4) 年度 朝鮮儒學史 朝鮮文學演習
1930 (昭和 5) 年度 朝鮮文學講讀 朝鮮文學特殊講義
1931 (昭和 6) 年度 朝鮮思想史概説 (朝鮮思想及信仰史) 朝鮮文學講讀演習
大山退溪書節要及退溪詩 朝鮮民謠
1932 (昭和 7) 年度 朝鮮思想史概説 朝鮮近代文學 朝鮮近代文學選
1933 (昭和 8) 年度 朝鮮思想史概説 朝鮮上代文學 朝鮮上代文學選講讀及演習
朝鮮の歌謠
1934 (昭和 9) 年度 朝鮮思想史概説 朝鮮上代及中世文學 演習 (朝鮮上代及中世文學選)
1935 (昭和 10) 年度 朝鮮文學概論 演習 (東人詩話・朝鮮中世文學選)
1936 (昭和 11) 年度 朝鮮文學概論 朝鮮に於ける異學派の儒學 朝鮮道學者の文學
1937 (昭和 12) 年度～1938 (昭和 13) 年度 未調査

ちなみに、同じく『青丘學叢』「彙報」にある「京城帝國大學法文學部卒業論文題目」(東方文化關係)の「朝鮮語學・朝鮮文學」に、以下のものがある。高橋の指導を受けたのはこの内、文學であろう。

- 1930 (昭和 5) 年度
「朝鮮古代演劇概観 金在喆」
「嶺南民謠の研究 李在郁」
1931 (昭和 6) 年度 該當無
1932 (昭和 7) 年度
「朝鮮語の助詞 方鍾鉉」※誤：方鍾鉉は次年卒(権)
「朝鮮語のヒアツス現象について 李崇寧」
1933 (昭和 8) 年度
「子音に就いて 方鍾鉉」
1934 (昭和 9) 年度
「佔畢齋といふ門徒の道學及び文學について 尹應善」
「主なる時調の作家に就いて 鄭鶴謨」
1935 (昭和 10) 年度
「經書診解の吐に就いて 李奎浩」

しては、此方面に向つても、もつと力のある斬新の研究と、熱心にして若々しい研究家の輩出が望まれ、其爲めにも多少舊い殻を持つに至った青丘學叢の休息を必要とするのである。…」とある。

「朝鮮古代小説の分類及支那小説の輸入と其影響 鄭亨容」

「李牧隱に就いて 孫洛範」

「朴燕巖の研究 申源雨」

「胥吏詩人を中心として觀たる近代委巷文學 具滋均」

講義ノートの概観

高橋亨の朝鮮思想関連講義は、思想及信仰史乃至は思想史がその一つで、また一つは儒學史乃至は儒學哲學である。以下、全 66 冊をそれぞれ分けて列記する（年次）。

朝鮮思想及信仰史 第三冊～同卷六昭和二年六月下旬・卷七昭和二年十一月初・同八卷

朝鮮思想史概説 第一冊昭和五年五月三日・同講本 第二冊～第六冊

朝鮮思想史 第一・朝鮮思想史概説講本 第二冊

朝鮮思想史概説講本 [最新] 第一冊昭和八年～第五冊昭和九年初冬

朝鮮儒學史 卷一昭和二年四月廿日起稿～第二拾冊昭和五年三月廿六日

朝鮮儒學史 號外一昭和二年十一月望 [序論續／許魯齋／高麗科擧]

朝鮮儒學史講本 第一冊昭和三年四月十七日～第七冊

李退溪與李栗谷 第一冊昭和五年～第三冊昭和五年八月廿九日・第四冊

支那朝鮮儒學哲學 第三冊・支那朝鮮儒學史 第四冊・第五冊

東洋道德 昭和六年

朝鮮異學派之研究 [構想メモ] 第一冊

異學派之儒學 [講義案] 第一冊昭和十年七月・朝鮮異學派之儒學第二冊昭和十年仲夏

～第六冊昭和十一年一月下浣

朝鮮異學派之儒學講本 第一冊昭和十一年四月七日～第四冊

高橋の講義ノートの表紙には、雅號「天室」と記し、上記のリストにみるように、題目と第何冊または巻数を記すほか、何年何月何日稿という起稿時期が無いものもある。「講本」と記し、さらに赤色にて「最新」と追記したものもあり、「序論續／許魯齋／高麗科擧」のように内容を追記したものもある。

また、上記の分類にみるように、構想メモ、講義案、そして講本と講本 [最新] と段階的に書き直されている点にも留意する必要がある。「朝鮮思想史概説」の場合、第一冊と第二冊が複数あるので、グルーピングしておいた。ここでいう構想メモと講義案とは、筆者が区分するために便宜上付けた名稱である。

現存の講義ノートは京城帝國大學開校翌年に起稿したものが最も早く、開校初年起稿のノートが残っていない。初年度には、博士學位論文はもちろん、小冊子『朝鮮宗教史に現はれた信

仰の特色』(1920)、「朝鮮に於ける儒學」(1923)、そして京城帝國大學豫科設置年に発表した『朝鮮史講座』特別講義「朝鮮儒學大觀」などがあったので、これらを教材として活用した可能性も充分ある。

なお、「東洋道德」とあるのは、「昭和六年八月二十六日至る廿八日」の「京畿道地方改良講習会講演」であるが、ノート後半には「昭和六年十月一日於金剛山温井里全鮮青年團講習會」での「李栗谷と郷約」がある。後者は「栗谷先生と郷約」とし『青年輔導講習會講演速記』(朝鮮総督府学務局社会課、昭和七年)に公刊される。教材として活用したか、表紙に「一、二年」と追記がある。

以下、大きく朝鮮思想史、朝鮮儒學史、朝鮮異學派之儒學に区分し、それぞれの全體様相について述べていく。

1. 朝鮮思想史

まず、『朝鮮思想及信仰史』第三冊より同巻八(中斷状態)までの不完全な6冊について見てみよう。

起稿年月は、第四の中間より始まる「高麗の部」の右上欄外に「昭和二年四月起稿」とあり、巻六表紙に「昭和二年六月下旬」とあるので、次節でみる『朝鮮儒學史』巻一の「昭和二年四月」より、現存しない『朝鮮思想及信仰史』第一冊の起稿が早かったことは明らかである。

いっぽう、内容をみれば、第三冊の冒頭は「第五節 三國時代に於ける新羅佛教三期」に始まり、すぐ「第二編 新羅佛教」と續き、第四に入ってから「〔第三編〕高麗の部」「第一章 高麗佛教第一期」が始まり、第五に入って「高麗佛教第二期」「第一章 天台宗の開立」が始まり、すぐ巻六に續く。次いで「普照國師」が始まり巻七に續く。八巻に入り「第八章 臨濟宗の將來」「第九章 麗末の佛弊」「第十章 高麗の道教及其佛教との關係」を終えた後、「〔第四編〕李朝の教政」が始まり、「第二章 太宗世宗の教政」の途中で中斷されたままである。

以上の内容は、章立ての変更はあるものの、書き直され、おおむね『朝鮮思想史概説』に反映されている。

つぎに『朝鮮思想史概説：講本』全6冊、『朝鮮思想史』と『朝鮮思想史概説：講本』の2冊、未完の『朝鮮思想史概説：講本(最新)』5冊について見ていく。

『朝鮮思想史概説：講本』全6冊は、「講本」の記しの無い1930年5月2日起稿の第一冊に始まり、「講本」と記して起稿年月の無い第二冊「講本(A)」と第三冊「講本(B)」に續き、第六冊に至って完結する。

目次の章立てをみると、序説・古代朝鮮の文化に續き、三國・新羅思想史に當る高句麗百濟の漢學・新羅文化・新羅の佛教・新羅君臣の崇佛と道説・新羅に於ける三教二教調和論があり、題して高麗朝思想史の下、太祖と佛教・高麗の僧階・高麗の漢學と科擧・高麗儒者の佛教觀・高麗の風水説、高麗佛教第二期の普照國師と高麗禪宗の復興・朱子學の輸入及斥佛論の勃興・高麗の道教及其佛教との關係があり、李朝思想史の下、斥佛教政・朝鮮佛教命脈維持の理由・李朝儒學の三期・朱子學の作出せる朝鮮の社會相・三教調和論附東學がある。以上、高橋自身

が観察調査体験した当時の状況をも含む「朝鮮思想史概説」の完結である。

なお、第四冊にある高麗朝思想史の最後章「高麗の道教及其佛教との關係」においては、第一節にあたる叙述を終えた後、「以下思想信仰史巻八第二節」と追記し、續く「~~第二節 高麗の道教と佛教との關係~~」の下に叙述した冒頭部分を中斷し削除する。『朝鮮思想及信仰史』巻八に同章同節があり、書き直す必要なしと判断したからであろう。

次に起稿年月の無い『朝鮮思想史』第一と『朝鮮思想史概説：講本』第二冊は、前者の書き直しとみなれるが、なぜか中止。再び書き直したものが、最初『朝鮮思想史概説』執筆から3年後に起稿した『朝鮮思想史概説：講本(最新)』第一冊である。表紙に赤字「最新」と追記し、他と區別する。

『朝鮮思想史概説：講本(最新)』は、第一冊が1933年起稿、第二冊が1933年6月起稿、第三冊は無記入、第四冊は1934年4月起稿、そして1934年初冬起稿の第五冊は破本状態にて内容も中斷のままである。

目次の章立てをみると、序説・古代朝鮮の文化・三國時代の三教・新羅文化・新羅の佛教・新羅君臣の崇佛と道説・新羅に於ける三教二教調和論があり、題して高麗朝思想史の下、太祖と佛教・高麗の僧侶の職階・高麗の漢學と科擧・高麗初世儒者の佛教觀・高麗の風水説、高麗佛教第二期・普照國師と高麗禪宗の復興・朱子學の輸入及斥佛論の勃興・高麗の道教及其佛教との關係、までである。

現存最終の第五冊においては、最後の章「高麗の道教及其佛教との關係」の冒頭を叙述して中斷のままである。ここの叙述内容は、前述の『朝鮮思想史概説：講本』第四冊の冒頭部に當る。比べてみると、『朝鮮思想史概説：講本(最新)』は、章立てにおいては下線部の如く語句の補足修正があり、叙述量においては一冊分以上増補されている。

ちなみに、第五冊は、後半部に切り取られた破れがあるが、一方、高麗時代文學關係の「(雪谷鄭誦の後半)、偃遜、李遁村、金楊若齋。第三章 李牧隱及其門下後進(冒頭中斷)」につき叙述した破本の糸綴じ束二つと、「(李穡の事蹟の後半)、二 詩文」の二束が挟まれている。書き直すために参考資料でなければ、迷い込まれたものであろう。

以上をまとめてみると、最も早く起稿した『朝鮮思想及信仰史』を執筆した高橋は、これに基づいて1930年起稿『朝鮮思想史概説』を執筆して『朝鮮思想史概説：講本』全6冊を完成する。その後、『朝鮮思想史』第一と『朝鮮思想史概説：講本』第二冊までの書き直しを中止し、新たに書き直した『朝鮮思想史概説：講本(最新)』1933年起稿から1934年初冬起稿まで5冊が未完の状態で現存する。書き直しは約3年間隔で行われていたのである。

なお、本紀要に公刊された「朝鮮思想史概説(上)」・「同(下)」は『朝鮮思想史概説：講本』全6冊を翻刻したものである。

2. 朝鮮儒學史

高橋の「朝鮮儒學史」講義の全容をまとめると、次のようである。すなわち、『朝鮮儒學史』全20冊が基盤となり『朝鮮儒學史：號外一』があり、これらを書き直した『朝鮮儒學史：講本』

全7冊と、その續編にあたる『李退溪與李栗谷』全4冊がある。そして『支那朝鮮儒學史』が執筆されたものと判断される。現存の「朝鮮儒學史」講義は全體的にみて未完の状態である。

まず、全20冊となる『朝鮮儒學史』の全容をみてみよう。

『朝鮮儒學史』は、卷一を起稿した1927年4月より、1930年3月に起稿した第二十冊までが現存する。その内容は「第一編 朝鮮古代の儒學」、「第二編 高麗の儒學」、「第三編 李朝の儒學」、「第四編 李朝の儒學第一期」そして「李朝儒學史第二期」という区分の下、執筆されている。冊数からみて朝鮮王朝部分が主をなしている。

すなわち、卷四で高麗時代が終わり「李朝の儒學」に續き、すぐ始まる「第四編 李朝の儒學第一期」は卷五に續き、さらに第十冊に至る。すぐ第十冊で始まる「李朝儒學史第二期」の「第一章 李退溪」が第十一冊に續き、「第(三)章退溪門徒」が第十六冊で終る。次いで執筆し始める「李栗谷」は第十七冊に續き、第二十冊に至る。

現存最終の第二十冊は「李栗谷」講義の最後に該当する「栗谷の門人」の概略を紹介し、代表的門人である「鄭曄・金長生・趙憲」という題の下、「鄭曄」講義を終えたところで終了する。すなわち、「金長生・趙憲」部が現存しない、中斷の状態である。

つぎに、『朝鮮儒學史』を書き直し始めた『朝鮮儒學史:講本』第一冊は、「李朝儒學史第二期」の「第一章 李退溪」を執筆し始める『朝鮮儒學史』第十冊起稿の1928年3月の翌月に起稿する。つまり、高橋は1927年11月に『朝鮮儒學史:號外一』を起稿し「許魯齋と朝鮮儒學」と「高麗朝の科擧」とを叙述し終え、これを含めて『朝鮮儒學史』冒頭からの書き直しを開始したのが1928年4月であったとみられる。繼續して同講本第七冊まで「李朝儒學史第二期」の初章「李退溪と同時代の儒學者」を終えるのである。『朝鮮儒學史』第十冊で「李退溪」執筆に入る前頃、『朝鮮儒學史:講本』第一冊を起稿し、講本での書き直しは「李退溪」には入らず、その前で終了し、後述の『李退溪與李栗谷』に續くのである。第一冊のほかの『朝鮮儒學史:講本』に起稿年月の記入はない。

ここで『朝鮮儒學史』第十冊以後の起稿執筆状況を詳しく確かめておく。

第十冊中ほどに始まった「李朝儒學史第二期」の「第一章 李退溪」講義は、同1928年6月起稿の第十一冊と7月8日起稿の第十二冊と7月25日起稿の第十三冊に續き、第十三冊において始まる「李退溪と同時代の儒學者」は8月7日起稿の第十四冊で終る。次いで「退溪門徒」、そして代表的門人「曹芝山」と「金誠一」を終えた後に續く「柳成龍」は12月8日起稿の第十五冊で終り、「趙月川」「李龜巖」「奇高峰」と續き、「鄭寒岡」は起稿年月記入の無い第十六冊で終る。「李退溪」關係講義はここで終了し、續いて始まる「李栗谷」は1930年1月25日起稿の第十七冊を經、最終の第二十冊に至る。

以上の『朝鮮儒學史』第十五冊起稿と第十七冊起稿との間、「李退溪」關係の後半部の起稿と「李栗谷」起稿年月の間、すなわち1928年12月8日から1930年1月25日に至る13か月半、高橋は、この2冊の執筆のほかは何をしたのだろうか。推測するに、高橋は1928年4月『朝鮮儒學史:講本』第一冊を起稿してから續く講本執筆を主とし、これと並行して『朝鮮儒學史』をも斷續的に執筆したのであろう。つまり、起稿年月記入の無い『朝鮮儒學史:講本』全部がこの

空白期間中に執筆されたとみられるのである。

つぎは、『李退溪與李栗谷』全4冊である。1930年起稿の第一冊、1930年8月29日起稿の第三冊、起稿年月記入の無い第四冊となる『李退溪與李栗谷』は、『朝鮮儒學史：講本』の續編となり、『朝鮮儒學史』後半部の書き直しに該当する。すなわち、高橋は1930年3月26日起稿の『朝鮮儒學史』第二十冊を中斷したまま、『朝鮮儒學史』の書き直しを進め、『朝鮮儒學史：講本』に續づく『李退溪與李栗谷』を執筆し始めたと判斷される。『李退溪與李栗谷』第四冊は「李栗谷」の「第四節 栗谷と經綸」を終えた後、「第三〔⇒五〕節 栗谷の學」の「1、栗谷の學の師承」に繼ぐ「二、栗谷の理氣說」で終わっているが、『朝鮮儒學史』と對照すると、第十八冊・第十九冊・第二十冊に「栗谷の理氣說」の後、心性論・四端七情理發氣發論・修養論・退溪と栗谷・人心道心四端七情批判、「第〔五〕節 栗谷の著述」「第〔六〕節 栗谷の門人」と續くのだが、『李退溪與李栗谷』に後冊は現存せず、中斷状態といえる。

このほか、前後の冊を缺く、起稿年月記入の無い『支那朝鮮儒學哲學』第三冊、『支那朝鮮儒學史』第四冊と第五冊がある。以下でみるように、上述の「朝鮮儒學史」講義ノートの中、最後に書かれたものとみられる。

内容をみると、現存しない第二冊に續づく「靜菴學說」を終えた第三冊では、次いで「李退溪以前の學者」の下、「金安國慕齋」「李彦迪」「徐敬德」「盧蘇齋」「曹南冥」を講義し、「李退溪」講義が第四冊に續き、「李栗谷」講義は第五冊に續く。第五冊では、「李栗谷」の「第三節 栗谷の學」の下、栗谷の學・栗谷の理氣說・心性論・四端七情理發氣發論・修養論・退溪と栗谷・人心道心四端七情說批判と續き、最後の「人心道心四端七情說批判」の途中、「栗谷が答成浩原書に彼の性情論を一圖に表して〔儒學史廿に續く〕」と記し、中斷する。『朝鮮儒學史』第二十冊には前述のように「人心道心四端七情批判」の後に「第〔五〕節 栗谷の著述」「第〔六〕節 栗谷の門人」がある。よって『朝鮮儒學史』第二十冊起稿の1930年3月以後、『支那朝鮮儒學史』第五冊が執筆されたと明言できる。

また、目次において「李退溪」と「李栗谷」の部分は、『李退溪與李栗谷』と同じであり、『李退溪與李栗谷』第三冊の起稿は1930年8月29日である。すると、『支那朝鮮儒學哲學』第三冊が、これより早く執筆された可能性は極めて希薄である。

いっぽう『支那朝鮮儒學哲學』の「李退溪以前の學者」の章立ては、特有な點であり、『朝鮮儒學史』と『朝鮮儒學史：講本』には、これに該当する章に「李退溪と同時代の儒學者」があり、兩方とも「李一齋」「盧蘇齋」「曹南冥」が講義されている。後述の1936年4起稿『朝鮮異學派之儒學』第一冊の「第二章 朝鮮儒學第一期に於ける異學」に「徐花潭」「盧蘇齋」「曹南冥」「花潭門人及李一齋」とあることから、「李退溪以前の學者」の章立てを修正版と判斷される。

以上、みたように、高橋は『朝鮮儒學史』第二十冊まで執筆しながら、その途中、書き直しを開始し、『朝鮮儒學史：講本』と『李退溪與李栗谷』が作成されたのである。『朝鮮儒學史』もその書き直しも、最後冊の起稿は1930年である未完の講義録である。また、不完全な『支那朝鮮儒學史』が「朝鮮儒學史」書き直しの最終の講義ノートであると判斷しておく。

ここで、高橋の代表的論文「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達」と主著『李朝佛教』

の準備が1929年に公刊されたことを想起すると、以上のような『朝鮮儒學史』が執筆され、その書き直しが行われていた時期が高橋の絶頂期であったといえる。

3. 朝鮮異學派之儒學

『朝鮮異學派之儒學』は高橋の停年退職(1939.4)4年前に起稿したものであり、合せて11冊が現存する。京城帝國大學在職晩年の新たな面目をうかがえる資料であり、前述のように、すでに翻刻公刊されている。

構想メモとみられる1935年6月起稿の『朝鮮異學派之研究』第一冊があり、本格的執筆は同年7月起稿の『異學派之儒學』第一冊に始まり、續く『朝鮮異學派之儒學』第二冊を同年仲夏に起稿、第三冊を8月、第四冊を12月、そして1936年1月に第五冊と第六冊を連続起稿し、全6冊にて一段落する。高橋の1936年講義科目に「朝鮮異學派之儒學」があり、これを便宜上『朝鮮異學派之儒學:講義案』と稱した。

この書き直しは、1936年7月起稿の『朝鮮異學派之儒學』第一冊に始まり、起稿年月記入の無く「講本」と記した第二冊・第三冊・第四冊と續き、中斷したままである。すなわち、『朝鮮異學派之儒學:講本』は未完の講義録である。

以下、それらの内容を紹介しておく。

講義構想メモの第一冊では、「異學の概念」および尹白湖[鏞]、朴西溪[世堂]、與猶堂[丁若鏞]、金正喜の関連資料を雑多に抜粋記録しており、鄭霞谷[齊斗]に對しては「後に回す。別冊あり」と記すのみであり、白雲[沈大允]はその著書四つを記している。これを基にして本格的に執筆した『朝鮮異學派之儒學:講義案』全六冊においては、尹白湖[鏞]、朴西溪[世堂]、沈白雲[大允]、李白雲[炳憲]、丁茶山[若鏞]、鄭霞谷[齊斗]、金阮堂[正喜]の順に各自の事蹟と學問について具體的に詳述している。七名が時系列に並んでいないので、講義構想メモを大幅補足しつつ、準備され次第に執筆したものと思われる。

いっぽう、『朝鮮異學派之儒學:講本』では、まず異學の概念、朱子學の東方傳來、元の科擧制度と明と朝鮮の官學について講義し、朝鮮儒學の三期區分を再度説明する。すなわち、異學概念および朱子學が官學の地位を得ていく過程、そして異學派を加えた朝鮮儒學史の時代區分を「序論」で説明する。そして朝鮮異學派の形成と歴史的展開を尹白湖[鏞]、朴西溪[世堂]、鄭霞谷[齊斗]順に書き直していき、次の丁茶山[若鏞]の叙述中に途絶えたまま、現存するという限界がある。いずれにせよ、『朝鮮異學派之儒學:講義案』を補完しながら内容の充實を期し、一貫した叙述であるのが特徴である。

以上の『朝鮮異學派之儒學』とは、高橋が構築してきた以前の朝鮮儒學史フレームの上に「異學派」の歴史的展開を新たに追加したものであり、これによって高橋の朝鮮儒學史研究の全體像が具現化された。

むすび

學問として朝鮮思想・朝鮮思想史、また朝鮮儒學史の構築は、京城帝國大學という植民地官

學アカデミズムの下、高橋によって成し遂げられたのである。近代學問としてその學術性は高い。朝鮮人の思想・文學研究を先導した高橋は、朝鮮人啓蒙教化の使命感とともに帝國知識人の政治的支配イデオロギー性をも強固に持っていた。従属性と非獨立性を朝鮮人の思想上の特徴とする高橋の學問成果が批判されてきたゆえんである。だが、この植民地帝國學問の宿命的な不條理を冷徹に透視し、そのような結論を導き出すまでの研究方法および研究内容を正確且つ徹底に暴露する作業は依然課題として残っている。京城帝國大學を本據として構築・移植された近代學問の連続と斷絶の様相もこの作業なくして究明することは出来ない。振り返ってみると、解放後韓國學界は植民地アカデミズムの學術成果に対する破壊的批判に熱中した餘り、その實相把握に徹底さが缺如していたと反省せざるをえない。高橋が遺した講義ノートは、その資料の一つとして貴重である。

【附記】本研究は JSPS 科研費 16K02200 の助成を受けたものである。